**週刊やすいゆたか再刊28号16年６月２日**

**ネオヒューマニズムのおさらい**

ネオヒューマニズムについての教職倫理学の講義(４月15日)後、提出してもらったコメントについて、いろいろ質問が含まれていたので、対談の形に編集し直してまとめてみました。田中今日子さんに質問者という形で書いていきます。

田中今日子:ヒューマニズムというのは「個人の尊重」「人格の尊重」を謳う考え方で、いわゆる人道主義ですね。ところが先生は、人間でないものを人間にするところに人間の特色があるとおっしゃり、着ている服や、ビジネスで扱っている商品が経済関係をとり結んでいるので、人間に包括されると言われましたが、それなら、物と物の関係が人間関係になってしまうので、「個人の尊重」や「人格の尊重」ができにくくなってしまいますね。ネオヒューマニズムでは本来のヒューマニズムはどう変化するのですか？その点講義では説明不足だったのか、分かりませんでした。

やすいゆたか︰なかなかするどい質問ですね。確かに説明が不十分だったと反省しています。近代ヒューマニズムは、近代社会における人格的諸個人が自立が背景にあります。近代国家が形成され、その中で個人の人権の確立が見られます。そして主体的に自分の頭で考えぬくという意味で近代的な主観「考える我」の確立ですね。ええ、デカルトの「我思う故に我有り」です。自分が考えて、正しいと思ったことに基いて行動する自立的な主体です。それで事物の客観的な認識が可 能になり、近代科学に基づく科学技術の発達があり、産業革命が起こったのです。

　しかしそれで出来上がった近代工業社会は、巨大な生産機構とそれを支える近代国家の官僚機構で構成されていて、上意下達のピラミッド型で、個人は極めて無力です。大量生産大量消費体制ですから、その体制の中では平均化・無個性化され、同じ欲望を持って非主体的に生きる大衆にさせられてしまっています。個人尊重で始まったはずの近代は、いつの間にか、人格喪失の現代になってしまっていたということです。

　それで現代ヒューマニズムは、巨大な物質的な機構の支配、大量に生み出されてくる、均質的な物によって支配されていることに反発し、物からの解放、主体性の回復を叫ぶようになったということです。もちろんこの現代ヒューマニズムの人間性回復の叫びを継承しなければならないわけです。

　ではどのようにして巨大な我々の意志から自立してそびえ立つ、産業や国家の機構、それらから生み出される大量の商品・サービスの洪水から、我々の主体性を回復でき、自己実現ができるのでしょう。

　現代ヒューマニズムは、人間の物化、物象化、人間疎外に異議申し立てをし、物の支配から脱却するために、物化された体制を解体しようとしました。一九六〇年代末のスチューデントパワーの運動はその象徴でした。しかしこれはいわゆるガス抜きでしかなく、打ち上げ花火のようにはかなく消えてしまいました。それで近代の主体的存在としての「人間」というのは幻想ではないかという議論が出てきまして、社会の構造によって思想も規定されているので、先ず構造やシステムを理解することが大切だとされ、「人間の死、言語の支配」と言われました。

　しかしそうした構造や言語も元々、人間の営みであり、人間にとって他者ではないはずです。我々は個々人の身体的な枠内でしか自分を捉えていなかったり、社会的諸事物や環境的自然、社会的システムや組織を外部の他者や事物として捉えてしまうけれど、そうした態度にこそ限界があったのではないかということにきづいたのがネオヒューマニズムが起こるきっかけです。

　人間は身体の枠内では自己を維持できないし、自己の能力を実現できないのです。道具や機械を使い、他人と組織的に協同し合いながら、社会的諸事物を生み出し、環境と交渉しながら、自己と環境の再生産をしているわけで、それらの全体が人間化された自然であり、非有機的身体になっているわけです。それらを人間に包括して、その上で、どうすれば個人として、集団として、社会人として、自然の一部としての自己を実現できるかを考えるという立場に立たざるを得ないわ けです。これがネオヒューマニズムです。

　そうしますと、自由に生きると言っても事物や組織を包括した上で、いかに自分の意志を貫くかということになりますから、抽象的に個人の立場にしか立っていなかったのに対して、著しく制約され、物に縛られている事に気づきますね。個人や人格の尊重など甘い事になってしまいます。しかし、それが現実を引き受けて、その現実を自己自身として生きるということで、そこで初めて自由を制約するものと戦うことになり、その中で初めて自己実現ができるのです。

　物や組織や他人を自分から切り離し、抽象的な人格に踏みとどまっていては、その自由は観念的なものでしかなく、何も実現できないのです。教師になって教育をしようとすればクラスの現実、それを取り巻く社会の現実を自己自身の姿として捉え返して、それをいかに変革できるかを考えなければ、何一つ自分の教育理念を実現できません。単なるティーチング・マシンでしかなくなるのです。

田中:では六〇年代末の学生運動は、人間疎外の現実を告発し、それをもたらす社会やそれを補完する大学を解体しようとしたわけですが、その際に人間を個人として捉え、大学や社会を物の体系として捉え、物が人間である主体を抑圧しているから、そんな大学は解体してしまえと叫んだのですか。

やすい:学生運動にはいろんなセクトも関わっていたので、一概に言えませんが、統一した改革の具体案もなくて、また議論を通じて改善案を作り上げていくには、意見がバラバラでした。勢い、バリケード封鎖して機動隊と華々しくやりあうことでヒーロー気分を味わって、挫折していったということです。つまり大学にしても資本主義体制や国家にしても、所詮は、人間を抑圧して体制の維持のために支配する装置であり、従って解体すべき物として捉えられていたわけですね。つまり、主体としての人間の対極に固定されていたわけです。

田中:でもそれは人間自身が作り上げていた組織や機構であり、自分たちの営みの形であることは分かっていたのでしょう。

やすい:ええ、若きマルクスの疎外論を使って、自分たちが創りだしたものが自分たちから自立して他者である物になり、自分たちの首を絞めているから、自己疎 外だとは思っていたのですが、それはしかし主体である人間とは対極の物に転化してしまっている、物の支配だという受け止め方だったので、対応が物理的に解体しようという方向になってしまっていたのです。まあ過激派が主導権を握っていったことも原因ですが。

田中:ということは潜在的には人間と物を対極に置く現代ヒューマニズムも物を人間として包括する思想を内包していたことになりますね。

やすい:ええ、それが自覚できなかったということですね。でも実際にはいつまでもアウトサイダーでいることはできないので、ロングヘヤーを切って就職することになるし、大学も産学協同で資本主義体制と有機的に結びついていかざるを得ないところがありますね。

田中:それじゃあ、現代ヒューマニズムは、経済システムや科学技術、国家機構などが、主体としての一人ひとりの人間の意志から独立してそびえ立ち、人間を歯車やネジ釘のように物化して支配しているので、人間と対極にある機械的な自然法則で動くように経済法則て動く物として存在していると考え、そういう物の体系を否定して、人間の主体性を取り戻そうとしたわけですね。でもどうしたらいいかわからなかったので、スチューデント・パワーは解体してしまえという方向 にいって挫折したという総括ですね。それでやすい先生は、そういうがんじがらめの体制自体を人間の現実として捉えて、その中で主体性を回復する方法を探れっていうわけでしょう。到底無理だからぶっ壊せだったんじゃないですか？

やすい:だからぶっ壊すだけの実力があったわけではないし、ぶっ壊したとしても、新しい社会システムの構想がバラバラだったので、改革がうまく進むはずもなかったのです。まずは現実の社会の構造がどうなっているのか、しっかり見極めた上で、どういう改革が可能なのか見定めていかなければならない。主体の意志がどうだなどと言ってられないというのが構造主義です。それでフーコーが「人間の死、言語の支配」と言いました。自分で考え行動する主体としての人間は幻想で、社会のコードは出来上がっていて、その許容範囲で反体制的な考えや行動も形成されているといいます。何も主体的に考えだされたものではないというのです。

田中:それをやすい先生の「ネオヒューマニズム」は、そういうシステムやコード包括して、人間と捉え返そうというわけですね。人間ではないものを人間と捉え返したところで何が変わるのかもうひとつピンとこないのですが？

やすい:人間は身体的な枠で人間を捉えてしまい、身体外の諸事物は人間ではないとみなすので、自分自身として世界を捉えられないわけですね。そういう見方では、自分自身を狭く捉え世界の中で、事物の中で自己を実現しようという気になれなくなってしまうのです。先ず部屋を片付けようとしたら、自分の部屋を自分 自身としてとらえれば、美しく清掃され、整理された部屋を見て、自分自身が美しくなったという喜びが大きくなります。実際、自分の家、自分の部屋は自分自 身のように愛着を感じるものですね。

田中:自分の服は、自分＋服で、やはり自分ではないように思いますね。自分のボールペンは、自分の持物ではあっても自分だとは思わないでしょう。

やすい:既成の人間観では、人間にしても神にしても個物の名称のように捉えていたわけです。ですから身体的な諸個人が人間だということになります。しかし人間とは何か考えますと、身体的な個人だけに限定していては理解できません。

人間の作り出した社会や文明、歴史の総体として人間を理解する必要があります。 経済学的に人間を理解しようとすると、人間の労働は商品やサービスの価値として事物の属性として理解してはじめて説明がつくわけです。事物と事物の関係として物象化されて人間関係が捉えられるわけで、人間の中に社会的諸事物は包摂されています。

字を書くときにボールペンは私の手の延長になっています。ボールペンが書いたのではなく、私が書いたのですから、ボールペンは私に包摂されていますね。服を着てはじめて人前にでますから、人前での私は服も含めて私なのです。裸の付き合いは特殊なケースですね。確かに体と服と比較してどちらが人かと言えば、体の方を人と考えていいですが、服も含めて自分だと捉え、服装に自分自身を表現する必要があるわけです。そういう物も含めて人間を捉えることも我々は普段しているわけですが、物は人ではないという固定観念に支配されているので、忘れているのです。

田中︰なるほどね、でもさすがにゴミの山や核兵器や原発などは人間とは認めたくないですね。もしそれらも人間だと認めたら、それらにも人権があって、なくすことができなくなってしまいます。

やすい：そういう意見の人が多いですね。既成の人間観では、人格が宿っているとされる身体的諸個人だけが人間でした。その人格的諸個人に人権が認められるわけですね。ところが人間の範囲を社会的諸事物や環境的自然にまで広げた場合に、それらも人間ならそれらにも人格や人権を認めなくてはならなくなると危惧されるわけです。

　そうではなく、人格を宿している身体的諸個人の人格が人格的諸権利を持っているわけですから、新たに人間に包摂された人格を持っていない事物にまで権利を与える必要はないのです。ただし、事物が明らかに人格を持つ主体として現れた場合は人格的な諸権利を認めないといけませんが。

　それからゴミの山、核兵器、原発などはこれこそ、人間の現実ですから、自己自身の姿として凝視し、自分たちがサバイバルするためには自己否定的に克服していかなければならない人間の汚点として自分自身の姿と認めなければなりません。そうでないと本当に自分自身の問題にならないので、解決は後回しにされて取り返しがつかないことになってしまいます。

田中:しかし、いくらこのボールペンも人間だと認めろと言われても、私にはボールペンにしか見えません。先生の論法だと猫を見ても、人間として見ろといわれそうですね。

やすい:だから既成の人間観が間違っているから改めろというのではないのです。それじゃあ生物学的に考えてみましょう。貝を見て、貝殻と貝の身がありますと、貝は貝殻も含めて貝に見えますね。

田中:え？貝殻は貝の体ではないのですか？

やすい:幼虫の時には貝殻がついていません、分泌された炭酸カルシウムが身の周りに凝固して貝殻になるので、殻の部分は身体ではないので衣服や住居にあたるわけです。もし貝殻も含めて貝とみなせるのなら、人間も衣服や住居を含めて人間とみなしていいことになります。

だから身体的に人間の器官に含まれていない事物でも、人間の身体の延長や代替として機能すれば、人間の身体化された事物として認めてもいいのです。それを非有機的身体と呼びます。動物は非有機的身体が種によって狭い範囲に固定されていますが、人間は全自然と関わっているので、社会的諸事物や環境的自然を含めて人間と捉える必要があるわけです。

田中:先生は組織体含めて人間という場合に、組織体は意志や人格をもっているので人権も認めるべきだということに成りますね。そうしたら個人は組織体に対抗できなくなり、ますます抑圧されますね。

やすい:組織体は個人によって構成されているので、個人の能力を引き出し、やる気を高めないと、組織体の目的が果たせないので、個人の人権を抑圧するだけではだめなのです。たしかに両者には葛藤がありますから、その矛盾を調整していって、良い関係を生み出すのが、組織体としても個人としても大きな課題です。もちろん個人は非力な面があるので、国家が法律などで保護すべきです。
　　　　　　　　　　　　　　　　　続く